

## <書評>ディーン・アンソニー・ブリンク『日本の詩と公衆：植民地台湾から3・11まで』

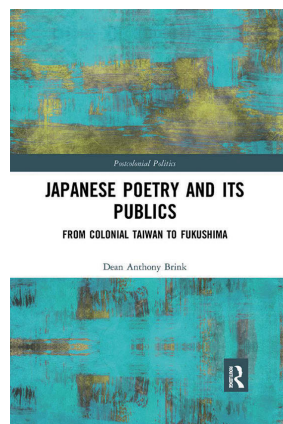
著者	マン ローレンス・E・M
雑誌名	日本研究
巻	64
ページ	228-231
発行年	2022-03-31
その他の言語のタイトル	<Book Review>Dean Anthony Brink, Japanese Poetry and Its Publics : From Colonial Taiwan to Fukushima
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00007816">http://doi.org/10.15055/00007816</a>

ディーン・アンソニー・ブリנק

# 『日本の詩と公衆——植民地台湾から3・11まで』

Dean Anthony Brink, *Japanese Poetry and Its Publics: From Colonial Taiwan to Fukushima*

ローレンス・E・M・マン



Routledge, 2018

詩を学ぶことに何の意味があるのだろうか。この問いは、思索的な幾多もの学生たちの頭をある時期一度はよぎったことのある問いであろう。また、文学研究者たちに対して挑発的な同業者たち、おそらく自身の研究分野が社会の実益に役立つものと考え、またはデータに突き動かされ研究を行う研究者たちから、時折浴びせかけられる質問でもある。二〇一五年に日本政府が国立大学に課した難題、すなわち「社会のニーズをさらに見据えた」<sup>(1)</sup>人文系の学部の見直しについてまわる問いの一つかもしれない。

この問いに対して『日本の詩と公衆』が出した答えは、複雑かつ洗練されたものである。しかしその答えを短くまとめ抽出するならば、「詩には一般人の関心の有無にかかわらず、社会に影響を及ぼす力がある」といったサウンド・バイト（繰り返し使われる標

語的なフレーズ）になることだろう。それは、「言葉は、支配形態に従う、または闘うために」<sup>(2)</sup>人々を行動に駆り立て、自身の世界を特定のモダリティで捉えるよう結束させることのできる意味作用の表象である」という、ハリー・ハルトウーニアンによる言説とイデオロギーの関係性についての説明を彷彿とさせる。

『日本の詩と公衆』の全体としての目的は、台湾で制作された日本語の詩歌を、権力とアイデンティティにかかわる植民地主義およびポストコロニアル言説、さらにその向こうにある環境批評やメディア理論にまで拡張することの可能な、洗練された解釈の枠組みに関連・位置付けることにある。著者のディーン・アンソニー・ブリנקは、詩歌は政治的レトリックやプロパガンダへの転用・使用が可能との主張を展開する。そして、多様かつ動的なポスト

コロニアル・アイデンティティ、過去と現在の不正に対する民主主義的抵抗、そして脱構造主義者たちが「享楽」(jouissance)と呼ぶ過剰な快楽中心主義の一種を表現するのにも利用が可能だと論じる。詩歌はそれゆえ、単純な芸術的抽象として扱われるべきでなく、むしろ社会や政治を具体化し、互いに依存する言語機能で構成されているものである。短歌や俳句、川柳などの日本の伝統的な詩の形式は、間テキスト性の様々な母型に依存しており、特にそれらが本書で紹介されている優れた詩人たちの手にかかる、社会批評のツールとして並外れた可能性を発揮するのだ。

本書は全六章から成り、加えて謝辞や序章、詩歌の参考資料、索引で構成されている。第一章・第二章は、台湾における帝国主義下の事業を支援するため、日本の古典の詩型を通して展開された間テキスト性の母型に関するブリンクの主張の解説に始まる。第一章では、植民地における自然を仮想化し、日本による本島の領有を記号化する手段としての、季語や歌枕などを含む日本の古典的な比喻表現や修辭法の様々な応用、脚色を描き出している。第二章では、植民地時代の台湾において日本語詩人たちが自身を位置付けるのに用いた複雑な力学や間テキスト性の枠組みを、新聞に掲載された正月の詩歌の事例研究を通じて探究している。非伝統的な環境における伝統的な詩型に支えられた間テキスト性の様々な母型の活用が拓き得る可能性を浮き彫りにしており、植民

地時代の文脈における日本の詩歌を学び、研究する意義の確固たる論拠となっている。これが本書の軸となる主張のひとつである。

第三章でも引き続き、日本側のレトリックやプロパガンダにおいて、伝統的な詩の形式が果たした役割について論じている。ここでは、最悪を極めた対中・対アジア侵略期、すなわち太平洋戦争前夜からその戦中期に至るまでを取り上げ、何名かの詩人の作品の分析を通じて、植民地計画に間テキスト性の網が拓き得る可能性について論じている。さらに、新移民排斥主義者の詩人の一部を取り上げ、その作品の神話的ヴィジョンの考察を通じて、その帝国主義にまつわる情動的な語りを生成し、支え得る可能性についても論じている。

第四章・第五章は、戦後期における台湾歌壇の活動を調べ上げた優れた二章となっている。収集されたデータの一部は、著者自身が歌壇の一員であることにより入手されたものである。この考察は、最初は日本人に、そして後には中国国民党により各々の関心が周縁化された日本語教育を受けた創設メンバーから、取り入れられた日本語の声を通して新たなアイデンティティを主張する若い世代の台湾人にいたるまで、戦後期に台湾に根ざした歌人たちの共同体が多様性に富んでいたという理解をもたらしてくれる。ベネディクト・アンダーソンの提唱した「遠距離ナショナルイズム」(p.138)のような解釈の枠組みを想起させる第五章は、3・

11以降に創作された詩歌を特に重点的に考察している。これらの台湾歌壇に関する章で浮上し、十分な答えを得ることのできない疑問には、より若い世代の、つまり真のポストコロニアル世代による日本語での創作意義に関する問いが挙げられる。

第六章は、日本や台湾、そしてその他の言語の詩歌を専門とするブログを開設した詩人に関する二つの事例研究を通して、ポストコロニアル・アイデンティティの構築、そしてポストコロニアル的な修辭の仕掛けにおける帰属をめぐる問題の再交渉に関する記述で締め括られている。この章では、それまでの章で明らかにされた創作母体（マトリクス）の接触面の範囲をさらに広げ、ポストヒューマンをもその考察対象範囲に入れている。

ポストコロニアル時代における政治シリーズの一冊として刊行された『日本の詩と公衆』は、その政治的メッセージを率直に伝えている。あらゆる覇権者は、真つ向から攻撃されるものだ。例えば、一九三〇年代―一九四〇年代にかけての日本軍の侵略について、著者は次のように述べる。「私は、日本の中国での戦争は、残虐かつ隙あらばつけ入ろうとする帝国主義者が、内戦や多数の帝国主義者たちにより弱体化した国に対して行ったものであるとの本多勝一の見方に同意する」(56)と。台湾の政治家たちも、時折その批判の対象となる。「連勝文は、アメリカ型の新自由主義金権政治と中台間の経済統合の両方に突き進む中、人々のニーズ

に耳を傾けなくなつた中国国民党への反感により選挙に敗れた」(57)と著者は述べる。同じく3・11以後、「原子力の利益を守るため」(58)に動いた日本の政権も、そして「搾取的かつ利権に執着した」(58)東京電力の行いも、その厳しい批判に晒されている。

今日の自由民主主義において、植民地を拡大した時期の日本政府の行いに関する著者の意見に、異議を唱える人はほばいないことだろう。とはいえ、本書の率直な意見の示し方は、時に過剰な一般化に向かう傾向が見受けられ、テクスト、すなわち詩歌の主なテーマの解釈にも影響している。例えば、第一章では、徳川時代の日本は「中国の影に怯えていた」(59)とあり、また国学に刺激を受けた日本の詩の力の優位性に関するレトリックは「やや虚勢を張つたところがあつた」(59)との主張がある。なぜならば、「台湾でははるかに優れた漢詩を中国人が創作していたため」(59)とされているが、こうした還元主義的な見方には問題がある。中国人であれば、日本人より「優れた」漢詩や漢文を書くという考え自体が、民族主義的な言論により形作られたもので、この種のテクストの学識を損なうものである。本書で著者は、当然のことながら一貫して、日本語で詩作する台湾人たちに対する逆差別に異を唱える姿勢を貫いている。

同様に、第二章における新聞に掲載された現地の台湾詩人によ

る南京攻略戦の追悼詩の扱いについても、その説明が答える以上に多くの疑問が生じる。ブリンクにより「Even pine decorations are stood up/ to face the flag of the rising sun onto the Nanjing Wall 門松<sup>や</sup>えも立ち上がる／南京城壁に昇る日の丸を見上げるために」<sup>1</sup>と英訳されたこの詩では、「あらゆるものが任命された通り想像のファンタジーを演じるものとする持ち前の傲慢なユーモア」を表しているという。さらに説明は以下のように続く。「それゆえ門松は、台湾人にまでも体现させる傲慢さと、口にするのできない暴力の罪との両方を反映し、この詩において不気味な存在感を帯びている」(p. 75)。だが、いつどこでその門松は、こうした不気味な存在感を帯びるようになったのか。それは今日の台湾においてその詩を受容する際に生じたものなのか。あるいは一九三八年時点で生じたものなのか。詩人または読者は、そのたつた数週間前に、それらの罪が犯されたことを果たして知っていたのだろうか。著者はこの最後の疑問を答えずにいるが(p. 75)、『実のところこれは重要な問いである。南京虐殺での許し難い現実を「傲慢に」歪めたものとしてこの詩を言い表すのは、我々が現在知る残酷な真実の一部をその詩人が内々に知っていたことを意味する。

結論としては、本書から学ぶべきことは多く、中でも詩歌が(時には腐敗した)政治的なレトリックとのもつれにおいても尚、繁栄し得ることを明らかにしたのは、本書の最も重要な貢献といえよ

う。この点において本書は、ジハード主義系テロリスト団のレトリックにおいてアラビア語の詩の伝統が果たす役割を浮き彫りにしたエリザベス・ケンダルに共鳴するような研究でもある。詩歌の言語とレトリックとの密な関係に焦点をあてた『日本の詩と公衆』は、レトリックの力を明らかにし、プラトンのように、その力が用いられた先にもまた、意識を向けている。結局のところ、ヘゲモニーの言論の支持、あるいはそれへの抵抗から芸術を評価する可否かを選択する力は、その批評家にかかっているのだ。

## 注

- (1) グローヴ、二〇一五年  
(2) ハルトウーニアン、一九八八年

## 参考文献

- Grove 2015  
Jack Grove, "Social sciences and humanities faculties 'to close' in Japan after ministerial intervention," *Times Higher Education* (14 September 2015).  
<https://www.timeshighereducation.com/news/social-sciences-and-humanities-faculties-close-japan-after-ministerial-intervention>.  
Haroonian 1988

Harry D. Haroonian, *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*, University of Chicago Press, 1988.

(翻訳: 片岡真伊 (東京大学東アジア藝文書院特任研究員))  
\* 本稿は *Japan Review* 35 (2020) に掲載された英文テキストの日本語訳である。